



Takefumi Endo

遠藤武文

講談社
文庫

〔著者〕遠藤武文 1966年長野県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。
2009年、処女作『三十九条の過失』（後に『プリズン・トリック』と改題＝
講談社文庫）で第55回江戸川乱歩賞を受賞してデビュー。その他の著書
に、受賞後第一作の『トリック・シアター』（本書）、『パワードスー
ツ』（講談社）、『デッド・リミット』（集英社）、『炎上 警察庁情報分析
支援第二室〈裏店〉』（光文社）がある。最新作は『天命の扉』（角川書
店）。

トリック・シアター

えんどうたけふみ
遠藤武文

© Takefumi Endo 2013

2013年6月14日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277573-1

序章

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

7

16

56

89

133

168

180

終章	第十一章	第十章	第九章	第八章	第七章
----	------	-----	-----	-----	-----

338	321	300	262	232	204
-----	-----	-----	-----	-----	-----



講談社文庫

常州大学図書館
蔵書シ章

遠藤武文

講談社

トリック・シアター

序章

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

7

16

56

89

133

168

180

終章	第十一章	第十章	第九章	第八章	第七章
----	------	-----	-----	-----	-----

338	321	300	262	232	204
-----	-----	-----	-----	-----	-----

序章

富樫長道^{とがしながみち}は自分の両手を見つめた。指の間から血が滴^{したた}り落ちる。腹部を見た。水色のワイシャツが緋色に染まっている。

妻の泰代^{やすよ}を見上げた。泰代は富樫を見ていなかった。見開いた眼を佐々岡佳伸^{ささおかよしのぶ}に向けていた。泰代の視線につられて、佐々岡を見た。

佐々岡の腹部にはナイフが刺さっている。呻^{うめ}き声が佐々岡の口から洩^もれる。

「きゅ、救急車だ。救急車を呼ばなきゃ」

富樫は立ち上がりながら言った。

「ダメよ。逃げるのよ」

泰代の言うことが、すぐには理解できなかった。

「逃げる？」

「人殺しよ」

「何言ってる？ ナイフを持ち出したのは佐々岡のほうだ」

最悪の日になった。

「早稲田大学シネマ研究会」。大学時代の映画サークルのOB会に出席した。卒業以来だから二十年ぶりに昔の友人たちに会った。これまでもOB会開催の通知が来たことはあった。東京を離れ、大阪の会社に就職したので、なかなか出席できなかった。

泰代とはサークルで知り合った。結婚して以来、泰代も旧友たちに会っていないはずだ。今回は、泰代が乗り気だった。幹事から案内のハガキが届くと、必ず出席するんだと言って、早くからはしゃいでいた。どうせ東京に行くのなら、都内で一泊しようとは提案したが、それには気が乗らないようだった。変なところで、主婦の節約観念が働くらしい。

二十一時ちようどの「のぞみ」で帰るつもりだった。

信じられない事態になっていて、帰ることができなくなった。

学生時代、富樫は自主制作の映画を撮った。泰代のほかに、佐々岡佳伸、浜崎洋輔、依田菜緒実、谷美香、広田和喜が富樫の映画を手伝ってくれた。OB会に出て、浜崎、依田、谷、広田の四人が死んでいることが分かったのである。

まったく知らなかった。冨樫に葬儀の通知は届かなかった。おそらくそれは、冨樫に悪意を抱いている者たちのせいだろう。今日のOB会でも、冨樫に対して敵意を抱いている者が少なくないことをひしひしと感じた。反りが合わない者はどこにでもいる。

問題は彼らの死に方だった。事故。自殺。全員が異状死だ。二〇〇一年三月二十一日に山谷で浜崎洋輔がトラックに撥ねられて死亡した。二〇〇二年三月二十一日には国立科学博物館の屋上から谷美香が飛び降りて自殺。二〇〇三年三月二十一日には広田和喜が清洲橋で首を吊って死んだ。二〇〇七年三月二十一日には水天宮で依田菜緒実が低体温症で死亡。全員、三月二十一日に死亡しているのも異常だ。

今日は三月二十日だった。明日が彼らの命日だ。葬儀に出席できなかったことの悔恨から、せめて墓参りだけでもと思い、日帰りをやめた。佐々岡が自分のマンションに誘ってくれたので、宿を探す手間も省けた。佐々岡は、両親が遺した晴海のマンションにひとりで住んでいた。

つい先ほどまで、三人で車座になって缶ビールを呑んでいた。死んだ旧友たちを偲んで、昔語りをしていた。佐々岡が皮を剥いてくれたりんごをつまみにした。

何がきっかけだったろう。佐々岡の両親の話だったか。佐々岡の両親は極右組織の

地下鉄霞ヶ関駅爆破テロに巻き込まれ、ともに脊髄を損傷した。都内の病院に入院したまま、数年前に相次いで息を引き取ったようだ。その話をしていたときだったろうか。突然、佐々岡から激しくなじられた。なじるのに飽き足らず、佐々岡はりんごを剥いたペティナイフを手に取り、冨樫に突き出してきた。必死に身体をのけ反らせ、ナイフを避けた。バランスを崩し背中から床に落ちた。そこに佐々岡が覆いかぶさってきた。

無我夢中でナイフを取り上げようと揉み合っているうちに、佐々岡が倒れた。

「正当防衛だろ？」

泰代に震える声で言った。

「誰も信じない」

「それでも救急車を呼ばなければ。このままじゃ死んじゃう」

「助かりっこないわ。見て」

泰代が顎あごを振った方角を見た。壁に時計が掛かっていた。十二時を十分回っていた。

「日が変わったのよ。今日は三月二十一日よ」

冨樫は胸の裡うちで「あつ」と叫んだ。

佐々岡を見下ろした。

佐々岡も死ぬのか。三月二十一日に？

泰代が廊下に出ていった。玄関脇の部屋に入るのが見えた。しばらくすると、スラツクスとポロシャツを抱えて戻ってきた。

「早く、シャワー浴びて、これに着替えて。そんな格好じゃ逃げられないわよ」

冨樫は佐々岡を見ていた。呻き声が小さくなっていた。心臓が鼓動を停止する瞬間が、すぐそこまで迫^{せま}っているのかもしれない。いま救急車を呼べば、まだ……。

「見捨てるのか」

「見捨てるも何も、もう死んでるわよ」

「生きてるよ。呼吸してる」

「虫の息よ」

「何を言ってる？」

「助かりっこないわよ。三月二十一日なんだから」

泰代が冨樫の腕を取り、自分の正面に引き寄せた。

「私に任せて。警察の眼も届かない所を知ってるから。さ、早く、シャワー浴びてきて」

泰代は冨樫の背中に手を当て、浴室の方向に誘った。泰代が手際良くことを運ぼうとしていた。冨樫は軽い違和感を覚えた。

いま、何時だろうか。

腕時計に眼を遣^やる。漆黒の闇夜の中では、文字盤の数字も針の位置も読み取れない。十二時を回っただろうか。アパートを出た時間とここに来るまでの経路を考えれば、間違いなく十二時を回っているはずだ。

東京では、そろそろ佐々岡が絶命する頃だ。いま頃は意識が薄れ、腹部の痛みも分からなくなっているのではないだろうか。

足がしびれる。地面に正座をしているので、小石が脛^{すね}のところどころを刺激して痛い。顔を上げると、漆黒の中に、小高い山の稜線^{りょうせん}を辛うじて判別することができる。この大きな古墳の前で死ぬことになるとは、冨樫や佐々岡たちと出会ったときには、予想だにしなかった。

今年二〇一〇年は平城遷都千三百年にあたる。千三百年は長すぎ、遠すぎ、時間の重さをイメージすることすらできない。眼の前の古墳の建設は、平城遷都よりさらに

四百数十年^{さかのぼ}遡る。この千数百年の間に、この国では何人の人間が殺されてきたのだろうか。

首に当てられた刃の感触が冷たい。

「ちよつと、足を崩してもいい？」

闇夜に向かって訊いた。

身体を動かした拍子に、首に痛みを感じた。刃で傷つけられたようだ。姿勢を崩すなという無言の圧力だと理解して、居住まいをただした。

「もう、そろそろかな？」

当然、返事はない。冨樫が返事をするわけがない。返事がなくても分かっている。佐々岡が死ぬとき、それは泰代自身が死ぬときでもあるのだ。

やり残したことはないだろうか？ 冨樫とふたりで過ごした日々のことを思い出した。幸福だったとは言えないかもしれない。かといって、不幸でもなかった。ただ、ふたりの間に、埋めることのできない溝があることを意識しない日はなかった。

アパートの隣人に、夫婦仲について根ほり葉ほり訊かれたことがある。詮索^{せんさく}好きな中年の女だった。あの女が隣に住んでいると分かっていたら、別の部屋を探していただろう。メロドラマを愉^{たの}しむように、他人^{ひと}の生活を覗き見して悦^{よろこ}んでいた。病んでい